

岡山大学全学日本語コースのカリキュラム改編について

内丸 裕佳子・坂野 永理・森岡 明美

Japanese Language Curriculum Reform at Okayama University
Yukako UCHIMARU, Eri BANNO, Akemi MORIOKA

要旨

近年岡山大学の全学日本語コースでは、従来の研究生や大学院生に加え、短期留学生の数が増加し、受講生の多様化が進んでいる。本コースでは毎年カリキュラムの見直しを行ってきたが、この度、受講生の多様なニーズに対応するため、大規模なカリキュラム改編を行った。この改編の大きな特徴は、従来の総合クラスに加え、さまざまなレベルに対応したトピック別の選択クラスを開講し、受講生の状況や興味に合った科目数と科目内容の選択を可能にしたことにある。本稿では2013年度の大規模なカリキュラム改編にいたる背景とその準備過程、改編前と改編後のカリキュラムの相違点、改編後に行ったアンケート調査の結果概略、今後の課題について述べる。

キーワード:カリキュラム改編, 受講生の多様化, 受講生のニーズ, トピック別選択クラス

1. はじめに

近年岡山大学の全学日本語コースでは、従来の研究生や大学院生に加え、短期留学生（特別聴講学生）の数が増加し、受講生の多様化が進んでいる。本コースでは2012年度に初級から上級までの6レベルを7レベルに増やすなど、毎年カリキュラムの見直しを行ってきたが、受講生の多様なニーズに対応するため、2013年度前期から大規模な改編を行ったカリキュラムで授業を展開することとなった。本稿ではカリキュラム改編にいたるまでの過程と、カリキュラム改編による全学日本語コースの変化について述べる。

本稿の構成は以下のとおりである。2節でカリキュラム改編の背景について述べ、2008年度から2012年度にかけてどのようなカリキュラムの見直しを行ってきたか概略を示す。3節ではカリキュラムの改編方針と2013年度の大規模なカリキュラム改編に向けた準備調査について述べる。4節では改編後のカリキュラムを示し、主な変更点と改編による利点について述べる。5節では改編後に行ったアンケート調査の結果の概略を示し、6節で全学日本語コースの運営に関する今後の課題について述べる。

2. カリキュラム改編の背景

2.1 岡山大学全学日本語コースに在籍する留学生の日本語力と学習目的

岡山大学の全学日本語コースに在籍するのは、次の1-3の留学生である⁽¹⁾。

1. 研究生・大学院生（岡山大学で学位を取得する学生）
2. 短期留学生（他国の大学所属の学生）

3. 学部・大学院入学前の予備教育を行う国費留学生

研究生・大学院生については、2008年7月に私費外国人留学生出願条件の目安として、旧日本語能力試験2級（現在のN2）以上もしくはTOEFL（iBT）61点以上とする依頼が教育・学生担当理事より各部長宛に送付されている。研究生・大学院生の主たる活動は自らの研究を進めることであり、英語で研究を行う場合は彼らの日本語力は問われないが、日本語で研究を行う場合は中・上級レベルの日本語力が必要と判断されたためである。短期留学生は、自国で日本語を全く学習せずに来日する者から上級レベルの日本語力を持つ者までさまざまである。予備教育の学生は、大学院入学前の学生と学部入学前の学生に分かれるが、大学院入学前の学生は研究生・大学院生と同じく、英語で研究を行う者の日本語力は初級レベル、日本語で研究を行う者は中級から上級レベルである。学部入学前の学生は日韓共同理工系学部留学生事業⁽²⁾による学生であり、入学後は学部生用の日本語で行われる授業を履修する。彼らの来日時のレベルは中級から上級レベルである。【表1】は岡山大学の全学日本語コースに在籍する留学生の日本語力、学習目的、日本語の学習にかけられる時間の有無についてまとめたものである。

【表1】 岡山大学全学日本語コースに在籍する留学生の日本語力、学習目的、日本語学習時間の有無

		日本語力	必要な日本語	日本語学習にかけられる時間
研究生・大学院生		初級 (英語で研究)	日常生活に必要な日本語	少
		中級～上級 (日本語で研究)	授業・研究に必要な日本語	少
短期留学生		初級～上級	日常生活に必要な日本語	多
予備教育 学生	大学院入学 前予備教育	初級～上級	日常生活に必要な日本語／ 授業・研究に必要な日本語	多
	学部入学前 予備教育	中級～上級	授業・研究に必要な日本語	多

【表1】からわかるように留学生の日本語力は初級から上級まで幅広く、また彼らの日本語学習の目的も日常生活に不自由のない日本語力の獲得を目標とする者から研究論文を書くことができる日本語力が必要な者まで多様である。さらに、日本語学習にかけられる時間も、短期留学生や予備教育の学生は多くの時間をあてることができるが、研究生・大学院生は研究が主であるため、日本語学習にほとんど時間が取れない学生が多く、この点でも学生により状況はさまざまである。

2. 2 留学生数の変化と問題点

1983年度の留学生受入10万人計画開始年から岡山大学の留学生数は右肩上がりの傾向が続いていたが（岡山大学留学生センター、2002、p.102）、2010年度に在籍数は減少し、2011年度は原発事故の影響もあり、さらに減少した。【表2】は2004年度から2013年度の岡山大学の留学生数の推移をまとめたものである。国費留学生に関しては、各大学の獲得競争が激しく、今後、増加の方向には転じにくいと思われる。一方で、増加しているのが交換留学などの短期留学生（特別聴講

学生)である。岡山大学では2013年度よりグローバル人材育成特別コース⁽³⁾を開講したが、これに伴い海外の大学との交換留学プログラムの拡大が見込まれ、今後も短期留学生が増加することが予測される。

【表2】2004年度から2013年度までの岡山大学の留学生数の推移

	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
短期留学生	20	27	33	32	56	46	52	49	68	92
国費留学生	140	138	141	130	120	92	99	78	72	78
留学生総数	547	539	566	585	611	627	572	510	474	465

(各年度5月1日時点のデータ)

全学日本語コースでは、予備教育の学生のために日本語集中コースを開講してきたが、上述のように国費留学生の減少に伴い、集中コースの受講者の減少が問題となっていた。一方、予備教育の学生以外には原則週4コマの日本語の授業を提供していたが、短期留学生からは日本語の授業が少なすぎるという声も寄せられていた。岡山大学短期留学プログラム(EPOK)生を対象にした調査では、学生の来日理由として、1.日本語の学習、2.日本文化をより理解する、であったという報告がされている(中村, 2005)。花見・西谷(1997)は、国立大学における短期留学生の日本語プログラムについて次のように問題点を述べている。「特別プログラムの中心は英語による専門科目の授業であるため、日本語学習に割り当てている時間は週に4、5コマ程度とそれほど多くない場合が一般的である。しかし、学生の主目的が『日本語習得』にあるという場合も多く、日本語教育体制について学生側から不満の声が出ている(p. 26)。」短期留学生は今後さらに増加することが見込まれるため、このような学生のニーズに対応する必要が生じていた。

2. 3 2008年度から2012年度までのカリキュラムの変遷

【表3】は2008年度から2012年度までのカリキュラムの変遷をまとめたものである。

2008年度から2012年度までのカリキュラムの変更点は以下のとおりである。

1. 減少する国費留学生の数に対応し、国費留学生のみを対象とした研修コース学生向けクラスを廃止し、私費の学生も受け入れる日本語初級集中クラスを開講した。
2. 主に英語圏の短期留学生を対象とした初級レベルのクラスを2010年度前期をもって不開講とした。これは自国で日本語を学習してから来日する短期留学生が増加し、初級レベルより中級レベルに多くの学生が行くようになったためである。
3. 「中級1」および「中級2」のそれぞれのレベルで、週1コマずつ開講していた「読む」「書く」「聞く」「話す」の技能別のクラスを2010年度より不開講とし、読む・書く・聞く・話すの4技能を高める週4コマの総合クラスを開講した。
4. 上級レベルの学生数増加に伴い、2012年度より上級レベルを「上級1」「上級2」の2つに分け、「上級1」では週4コマの総合クラスを開講し、「上級2」は従来の上級として開講していた4技能別のクラスをあてた。

【表3】2008年度から2012年度までのカリキュラムの変遷

	年度 レベル	2008 前期	2008 後期	2009 前期	2009 後期	2010 前期	2010 後期	2011 前期	2011 後期	2012 前期	2012 後期	
初級	1	研修コース (週10コマ)				初級集中 (週10コマ)				初級集中 (週9コマ)		
	1	初級1 (週4コマ)										
			初級1 (英語圏対象) (週4コマ)		初級1 (英語圏対象) (週4コマ)							
		初級漢字1 (週1コマ)										
	2	初級2 (週4コマ)										
			初級2 (英語圏対象) (週4コマ)		初級2 (英語圏対象) (週4コマ)		初級2 (英語圏対象) (週4コマ)					
		初級漢字2 (週1コマ)		初級漢字2 (週1コマ)								
中級	3	中級入門 (週4コマ)										
	4	中級1 (読む) (週1コマ)				中級1 (週4コマ)						
		中級1 (書く) (週1コマ)										
		中級1 (聞く) (週1コマ)										
		中級1 (話す) (週1コマ)										
	5	中級2 (読む) (週1コマ)				中級2 (週4コマ)						
		中級2 (書く) (週1コマ)										
		中級2 (聞く) (週1コマ)										
中級2 (話す) (週1コマ)												
				中級2 総合 (週4コマ)								
上級	6									上級1 (週4コマ)		
	7	日本語A (読む) (週1コマ)				上級 (読む) (週1コマ)				上級2 (読む) (週1コマ)		
		日本語B (書く) (週1コマ)				上級 (書く) (週1コマ)				上級2 (書く) (週1コマ)		
		日本語C (聞く) (週1コマ)				上級 (聞く) (週1コマ)				上級2 (聞く) (週1コマ)		
		日本語D (話す) (週1コマ)				上級 (話す) (週1コマ)				上級2 (話す) (週1コマ)		
その他									岡山を 知ろう			

3. 2013年度カリキュラム改編のための準備調査

全学日本語コースには、研究生・大学院生、予備教育の学生、短期留学生と多様なニーズを持つ留学生が在籍している。研究生・大学院生は学業の負担にならない程度の日本語学習環境を望んでいるのに対し、短期留学生・予備教育の学生はできるだけ多く日本語と日本文化を学ぶことを希望している。こうしたニーズに応えるために、2013年度に向けてのカリキュラム改編は以下の方針で行うこととした。

1. どのレベルの学生にも対応できるよう初級から上級までの7レベルは維持する。
2. 各レベルで開講されている週4コマのクラスに加え、さまざまなレベルに対応したトピック

ク別の選択クラスを週1コマあるいは2コマベースで複数開講する。

3. 大学院入学前の予備教育を行う国費留学生在が減少していることを鑑み、初級集中クラスを不開講とする。

上記の改編方針に基づいた選択クラスの科目選定にあたり、3つの調査を行った。

1. 各クラスの受講生数、受講生の特性・ニーズの分析

過去の受講生名簿および授業評価アンケート調査の結果を参考にして、各クラスの受講生数、受講生の特性、学習に対するニーズを検討した。これにより、従来、初級レベルにおいては漢字クラスが開講されていたが、漢字のみではなく、読み物や作文も扱う「読み書き」のクラスを開講することにした。また、会話のクラスのニーズも高いと思われるため、「初級会話」のクラスを開講することにした。

2. 新規開講科目に関するニーズ調査

中級以上のトピック別選択クラスについてはさまざまな科目案が提出されたため、中級レベルの学習者30名を対象に、新規開講科目に関するニーズ調査を行った。調査事項は次の3点である。

- ①現在のクラスに加えて週1回の選択クラスを開講した場合、それを受講するか
- ②開講予定科目の中でどの科目の受講を希望するか
- ③開講予定科目以外にどのような科目提供を望むか

この調査から、大半の学習者が週1回ベースでの選択科目の受講を希望していること、日本文化に対する理解を深めながら日本語技能の向上を望んでいること、日本語能力試験の受験を考慮した中級文法と語彙の学習に対するニーズがあることが明らかになった。

3. 非常勤講師を含む日本語教員への開講科目に関する聞き取り調査

これら3つの調査から開講科目を選定し、2013年度の大規模なカリキュラム改編となった。

4. 2013年度のカリキュラム

前節ではカリキュラム改編のための準備調査について述べたが、それをもとに作成されたのが、【表4】に示す2013年度の開講科目である。

【表4】2013年度開講科目一覧

レベル	2012年度 科目名	2013年度前期開講科目				
		総合クラス (4コマ/週)	選択クラス科目名 (コマ数/週)			
初級	1	初級1	日本語1A	初級会話(1)	読み書き1 (2)	
	2	初級2	日本語2	読み書き2 (1)		
中級	3	中級入門	日本語3	/	多読で学ぶ 日本語 (1)	映像で学ぶ 日本語1 (1)
	4	中級1	日本語4			
5	中級2	日本語5				
6	上級1	日本語6				
上級	7	上級2	日本語7(読むa)(1)	映像で学ぶ 日本語2 (1)	中級文法・ 語彙2 (1)	
			日本語7(聞くa)(1)			
			日本語7(書くa)(1)			
			日本語7(話すa)(1)			

レベル		2012年度 科目名	2013年度後期開講科目			
			総合クラス (4コマ/週)	選択クラス科目名 (コマ数/週)		
初級	1	初級1	日本語1A 日本語1B	初級会話 (1)	読み書き1 (2)	
	2	初級2	日本語2			
中級	3	中級入門	日本語3	中級文法・ 語彙1 (1)	プロジェクト ワークで 学ぶ日本語 (1)	新聞・雑誌で 学ぶ日本語 (1)
	4	中級1	日本語4			読み書き2 (1)
	5	中級2	日本語5			
上級	6	上級1	日本語6	プロジェクト ワークで 学ぶ日本語 (1)	メディア・ リテラシー (1)	日本を知ろ う (1)
	7	上級2	日本語7 (読むb) (1)			
			日本語7 (聞くb) (1)			
			日本語7 (書くb) (1)			
日本語7 (話すb) (1)						

カリキュラムの変更点と、改編による利点は以下のとおりである。

1. クラス名称の変更

短期留学生は、所属大学で初級レベルのクラスを修了しても、岡山大学のクラス分けテストの結果、初級のクラスに振り分けられることがある。このような学生はすでに初級日本語科目を所属大学で履修したとして、帰国後、岡山大学で受講した日本語科目が単位として認められないという問題があった。今回クラスの名称を変更することにより、その問題が解決される可能性もある。また、総合クラスの名称を「日本語1」「日本語2」とすることにより、段階的にレベルが上がるイメージも持てるようになる。

2. 後期「日本語1」クラスの二クラス開講

2012年度まで日本語未習者には「初級集中」と「初級1」の二つのクラスが開講されていたが、「初級集中」の不開講により「日本語1」のクラスの受講生が増えることが予想された。留学生は前期より後期に来日する者が多いため、後期のみ「日本語1」を二クラス開講することとした。「日本語1A」は日本語学習経験が全くない学生を対象としたクラスであり、「日本語1B」は日本語の学習経験がある学生を対象としたクラスである。

3. 選択クラスの大幅な増加

選択クラスの科目を各レベルで大幅に増やし、学生は週1コマから8コマまでの日本語クラスの受講が可能になった。例えば、日本語3レベルの学生は後期に「日本語3 (4コマ)」「読み書き2 (1コマ)」「新聞・雑誌で学ぶ日本語1 (1コマ)」「プロジェクトワークで学ぶ日本語 (1コマ)」「中級文法・語彙1 (1コマ)」の8コマが受講可能である。研究で多忙な研究生や大学院生は週1コマのみの受講も可能であり、日本語学習を主目的とする留学生は週8コマまで受講できる。

4. 多様なトピック別クラスの開講

新たに開講した科目は以下のとおりである。技能面・内容面においてさまざまなクラスを開講することにより、学生のニーズに応えることができる。

①「初級会話」(日本語1レベル対象/前後期開講)

日本語未習の学生を対象に日常生活に必要な会話を教えるクラス。英語で研究活動を行う研究生・大学院生が多忙な中、週1回ベースで簡単な日常会話習得できるよう配慮して開講したクラスである。

- ②「読み書き1」(日本語1レベル対象/前後期開講)
- ③「読み書き2」(日本語2～3レベル対象/前後期開講)
初級レベルの総合クラスで使用している教科書『げんき』の「読み書き編」を用いて、漢字を学ぶだけでなく、読む能力と作文能力を高めることも目的としたクラス。
- ④「多読で学ぶ日本語」(日本語3～7レベル対象/前期開講)
小説、漫画等を用いて多量のインプットを与えることにより日本語習得を図るクラス。自分のレベル、興味に合う本を学生自身に選ばせ、授業時間外でも本を読ませるようにする。また、学生にはその要旨や感想などを書かせたりする。授業では本の紹介(教員および学生)、用語の紹介等も行う。
- ⑤「映像で学ぶ日本語1」(日本語3～4レベル対象/前期開講)
- ⑥「映像で学ぶ日本語2」(日本語5～7レベル対象/前期開講)
ドラマ、映画等の映像および音声を用いて、多量のインプットを与えることにより日本語習得を図るクラス。授業では視聴に必要となる語彙や表現を学ぶだけでなく、ドラマ、映画等の内容に関連付けた話し合いや発表も行う。
- ⑦「中級文法・語彙1」(日本語3～4レベル対象/後期開講)
- ⑧「中級文法・語彙2」(日本語5～7レベル対象/前期開講)
練習問題を通して文法や語彙を増やすことを目的としたクラス。⑦では日本語能力試験N3レベルの、⑧では日本語能力試験N2レベルの文法・語彙を学ぶ。
- ⑨「プロジェクトワークで学ぶ日本語」(日本語3～7レベル対象/後期開講)
協働作業を通して考える力、調べる力、日本語で伝える力を伸ばすことを目的としたクラス。学生自身がテーマを決めて調査を実施し、その結果報告を行う。
- ⑩「日本を知ろう」(日本語5～7レベル対象/後期開講)
日本の社会問題や日本人の行動・習慣などを観察し、その背後にあるものの見方や考え方、価値観などを理解することを目的としたクラス。資料を読んだり、体験したりした後に、グループでの話し合いを通して考えを深めていく。
- ⑪「新聞・雑誌で学ぶ日本語」(日本語3～4レベル対象/後期開講)
既習語彙や文法がどのように使われているか、読むことを通して知ることを目的としたクラス。新聞や雑誌、広告、チラシ、カタログ、市役所からの案内、漫画など日本語で書かれたさまざまなものを皆で読み、日本での生活を豊かにする情報を得る。
- ⑫「メディア・リテラシー」(日本語5～7レベル対象/後期開講)
テレビ、新聞、雑誌、インターネット等で提供される情報を検証的に読み解いていくことを学ぶクラス。そこに「書かれていること」と「意図的に書かれていないこと」、そして書き方によってどのように情報が操作されたり、読者・視聴者に違う印象を与えたりするかを話し合いや発表を通して考える。

5. カリキュラム改編後のアンケート調査結果

2013年度の大規模なカリキュラム改編が留学生の多様なニーズに応えるものであったか、2013年7月に全クラスでアンケート調査を行った。短期留学生45名、大学院生・研究生・研究員・予備教育学生29名、合計74名分の回答を回収した（回収率76.3%）。調査内容は、日本語コース全体に関する質問5問、総合クラスに関する質問5問、選択クラス全般に関する質問5問、それぞれの選択科目に関する質問3問ずつである。

アンケート調査の結果は稿を改めて報告することにし、今回は日本語コース全体に対する評価、総合クラスに対する評価、選択クラスに対する評価の概要を述べる。主な結果は以下のとおりである。

1. 岡山大学の日本語コースに対する満足度

非常に満足36%，満足42%，どちらとも言えない19%，不満3%

2. 2012年度と比べて、日本語科目が増えたことに対する評価

非常にいい30%，いい37%，どちらとも言えない23%，よくない10%

「どちらとも言えない」が23%と高めだが、その理由を見ると、「その人の状況によってとれるクラスの数が違うから」「科目数の増加がどれだけ効果的なのかわからないから」「質問の意味がわからない」とある。2012年度に日本語コースを受講していない学生、および2013年度前期に少数の選択クラスしか受講していない学生も「どちらとも言えない」と答えているため、回答率が23%と高めになっていると考えられる。「よくない」という評価については、「多すぎる」「突然、負担が重くなって、ストレスも大きくなるから」「学生はクラブ活動、アルバイト、自由時間に時間を費やす必要があると思う」といった理由が挙げられている。

3. 総合クラスはあった方がいいか

はい86%，いいえ3%，わからない11%

4. 総合クラスの希望開講回数：

週1回3%，2回5%，3回20%，4回35%，5回22%，無回答15%

<回答者の内訳>

週3回：短期留学生40%，研究生・大学院生60%

週4回：短期留学生73%，研究生・大学院生27%

週5回：短期留学生69%，予備教育学生12%，研究生・大学院生19%

研究で忙しい研究生・大学院生も総合クラスを受講を希望しているが、週3回ベースでの開講を望んでおり、短期留学生は週4回あるいは5回、予備教育の学生は週5回の開講を望んでいる。

5. 選択クラスはあった方がいいか：

はい86%，いいえ2%，わからない7%，はい&いいえ5%

「はい&いいえ」という回答は、留学生が選択した個々の科目について「良いと思えるものと思えないものがあつた」という評価をしたことによる。

以上の調査結果から、受講生が全学日本語コースのカリキュラムを肯定的に捉えていることが窺える。

選択クラスの特徴は、技能面・内容面における多様性だけでなく、例えば「多読で学ぶ日本語」「映像で学ぶ日本語」「中級文法・語彙」のように、さまざまな学習レベルの学生が受講できる複合性にもある。アンケート調査の自由回答には、「多くの友達と出会える」「さまざまな国の留学

生の考え方を知ることができる」といった記述もあり、複合レベルのクラスの開講にも利点があることが窺えた。

トピック別の選択科目の受講により、「総合クラスでは学べない知識が得られた」「映像や書物を通じて日本文化が学べた」という回答もあった。カリキュラムの改編により、留学生の多様なニーズに対応できる柔軟性のある科目提供が可能になったといえよう。

6. おわりに

岡山大学全学日本語コースでは、大規模なカリキュラム改編に基づく授業が2013年度前期から展開されている。2013年度前期に全クラスで行ったアンケート調査から、新カリキュラムによって留学生の多様なニーズに応えることが可能な教育環境の基盤が形成されつつあることが明らかになった。それと同時に、実際にコースを運営していく中で見えてきた問題点もある。今後の課題として以下の4点が挙げられる。

1. 各レベルでの最大受講コマ数

【表5】は2013年度の各レベルにおける最大受講コマ数をまとめたものである。日本語3レベルおよび4レベルには短期留学生が多数在籍するが、2013年度前期のみ日本語4レベルの学生の最大受講コマ数が6と他のレベルより少なくなってしまった。日本語学習が留学の主目的である短期留学生に対して、できるだけ多くの学習機会を提供することを考慮すると、今後の改善が必要である。

【表5】 レベル別最大受講コマ数

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6	レベル7
2013年度前期	7 総合4コマ 選択3コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	6 総合4コマ 選択2コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	7 選択7コマ
2013年度後期	7 総合4コマ 選択3コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	8 総合4コマ 選択4コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	8 総合4コマ 選択4コマ	7 総合4コマ 選択3コマ	7 選択7コマ

2. 「初級会話」クラスの受講状況

研究で多忙な研究生・大学院生でも週1回ベースで参加でき、簡単な日常会話が学べる日本語未習者対象の「初級会話」クラスを開講した。前期の「初級会話」の受講生は総合クラスとこのクラスの両方を取っており、「初級会話」クラスのみを取っている学生はいなかった。教員による当初の開講目的とは異なる受講状況となり、この点についても検討が必要である。

3. 受講生数の調整

日本語コースでは各クラスの定員を定めているが、前期の「多読で学ぶ日本語」「映像で学ぶ日本語2」「中級文法・語彙2」は定員を超えた数の学生が受講を希望した。複数のレベルにまたがって開講される選択クラスは総合クラスより受講希望者が多くなるが、指導効果や教室の大きさを考えると、希望者全員を受け入れることはできない。受講生数の調整も今後の課題である。

4. 授業内容

2013年度のカリキュラム改編により、新たに12科目が開講された。新規開講というこ

とで授業の運営については試行錯誤することも多く、授業内容の検討も必要である。前期は、新規開講した科目に関する授業実践報告会および勉強会を実施し、教員間で情報を共有しながら今後の改善点を明確にするよう取り組んできた。後期にも同様の報告会・勉強会を開催し、改善を続けていきたい。

2013年度後期にも前期と同様のアンケート調査を行う予定である。2013年度前期と後期のアンケート調査の結果は稿を改めて報告するつもりである。今後もカリキュラムの改善を重ねながら、より一層魅力ある日本語コースの整備を進めていきたい。

注

- (1) 全学日本語コースではクラス人数に余裕がある場合に限り、外国人研究員にも日本語授業の聴講を認めている。学部留学生（岡山大学で学位を取得する学生）を対象とした日本語教育は全学日本語コースとは異なるものであり、教養教育の外国語科目として行われている。
- (2) 日韓共同理工系学部留学生事業とは、1998年の日韓共同宣言に基づき創設され、2000年から開始されたもので、韓国の高校を卒業した韓国人学生を選抜して日本の国立大学の理工系学部へ毎年100名ほど招致し、日本の大学の学部生として4年間学ばせるという事業である。選抜された学生は3月から8月まで韓国で予備教育を受けた後10月に来日し、入学予定の各大学で半年間予備教育を受け、翌年4月から正規学部生として学ぶ。岡山大学では国際センターが予備教育期間中の当事業の学生を受け入れ、言語教育センターが日本語教育を担当している。
- (3) グローバル人材育成特別コースとは、2013年4月から実施されているカリキュラムで、全学部の新入生から優秀な学生を50名選抜し、実践的な英語力とコミュニケーション力を鍛え、グローバルに活躍できる人材を育成することを目的としている。このコースの学生は海外留学が義務づけられており、岡山大学の学生を海外へ留学させるのに伴い、海外交流協定校から迎え入れる短期留学生も増えることが予測される。

引用文献

- 岡山大学留学生センター（2002）『岡山大学留学生センター設立10周年記念号』
- 中村和泉（2005）「岡山大学短期留学特別プログラムEPOK - '04アンケート調査結果に見る学生のニーズ」『岡山大学留学生センター紀要』12, pp. 59-74.
- 花見槇子・西谷まり（1997）「教育の国際化と短期留学生受け入れプログラム」『留学生教育』2, pp. 21-38.